

J - ポログラム

時間とともに変化する桜のイメージ

12684009

鐘媛媛

平成 25 年 8 月 3 日

時間と共に変化する桜のイメージ

1. はじめに

桜は日本固有の樹木ではなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカなど北半球にも、また、オーストラリアなどの南半球にも広く分布している木である。しかし、単なる桜好きの感覚を超えて、「特別な花」と感じている国は日本以外にないかもしれない。なぜ桜は日本人にとって特別な花だか、または昔から現代におけるまで日本人好きな桜はどのように変化するか、研究したい。

中国から見れば、桜の木が植えられる地方では、桜は春の見慣れる風景の一部である。私も小さいから春咲いている桜を見て大きくなっていると言えるが、桜は春の花以外に特別なイメージの感じは全然持っていなかった。しかし、学校に入った後教科書で桜は日本の国花としてみな崇拝すると分かった。やはり同じアジアの国でも花についての感覚はぜんぜん違う。中国では古代以来特別なイメージを持つ富貴に比喻ボタンとか、堅忍不拔な品格を持つ梅とか、さまざまな花がある。しかし、中国も桜の故郷だが、日本人の深く愛している花より中国人にとって桜は普通な花だけである。一方、日本では桜についてはさまざまな物語がある。例えば、古代日本人に対しては桜樹についての素朴な信仰から華やぐ王権に添える貴族たちの花になり、命の花になる。現代にいたるまで人生の転機を彩る花にもなっている。それで、桜は日本人の隅々に浸っている。

この論文では、「桜」という文字の登場・聖なる樹としての桜のイメージ・国花としての桜のイメージ・命の花としての桜のイメージ、転機としている桜以上五つの部分から日本人にとっての桜のイメージの変化や多様性を説明してきたいと思われる。

2. 多視点から見る桜

2.1 「桜」という文字の登場

日本古代の文献の中で「桜」という文字が最初に使われたのは、元明天皇の和銅五年

(七一二) に完成した『古事記』の伊邪本和氣(履中)の治世を記録した章の末尾に、「わかさくらべのおみ若桜部臣」らに「若桜部」の名を与えたという一節である。ここで初めて「桜」という文字が歴史に登場した。

三年(四〇二)の冬十一月のひのえとら丙寅の朔辛未(六日)に、天皇、両枝船を磐余市磯池に泛べたまふ。皇妃と各分ち乗りて遊宴びたまふ。膳臣余磯、酒献る。時に桜の花、御盞に落れり。天皇、異びたまひて、則ち物部長真胆連を召して、詔して曰はく、「是の花、非時にして来れり。其れ何処の花ならむ。汝自ら求むべし」とのたまふ。是に、長真胆連、独花を尋ねて、掖上室山に獲て、献る。天皇、其の希有しきことを歎びて、即ち宮の名としたまふ。故、磐余稚桜宮と謂す。其れ此の縁なり。是の日に、長真胆連の本姓を改めて、稚桜部造と曰ふ。

三年の冬十一の辛巳の朔辛未(六日)に、天皇は、かたまにぎわね両枝船(二艘をつなぎあわせた丸木船か)をいわれのいちしのいけ磐余市磯池に浮かべられ、皇妃とそれぞれ分乗してお遊びになった。かしわでのおみあれし膳臣余磯が、お酒を献じたとき、桜の花が、おさかずきに落ちてきた。天皇は、おあやしみになって、ものべのながまのむらじ物部長真胆連をお召になり、紹して、「この花は、咲くべき時季でないのに咲いたが、いったいどこの花のだろうか。おまえが、探してこい」と仰せられた。そこで長真胆連は、一人花を尋ねて、わきのかみのむろやま掖上室山で見つけて、献上した。天皇は、その珍しいことをお喜びになって、即座に宮の名となさった。いわれのわかさくらのみや磐余稚桜宮と申し上げるのは、それによるのである。

この日、長真胆連の本姓を改めて、わかさくらべのおみ稚桜部造臣といった。ⁱ

i

「履中紀」の記述から見れば、船での宴会でサクラの花びらは偶然さかずきに舞い落ちた。天皇の怪しむ気持ちで、特使を派遣して、「桜」を探しに行かせた。天皇は特使が献上した桜をとて好きになって、都の名にした。桜を探した特使にわかさくらべのおみ若桜部臣という名前をあげて、これから、「桜」という文字が登場し始め、私たちの目に入った。

これをきっかけ桜との絆を結びつけた。

2.2 聖なる樹としての桜のイメージ

見渡せば 春日の野辺に 霞立ち 咲きにほへるは 桜花かも (巻一〇. 五八
『万葉集』)

はるか遠くを見わたすと、春日野あたりに霞が立ちこめ、花が一面に咲きほこっている。あれは桜の花だろうか。ⁱⁱ

ii

満開の桜の花の生命力は、自然の実りの豊かさのシンボルだと古代人を思っていた。桜の満開を待ちわびる心情の根底には、満開の桜を豊作の予兆として喜んだ古代の農耕信仰も流れている。

日本の古代人たちに対して、さくらの開花は山の神の里への降臨の告知であった。彼らは里を訪ねた神を齋き祭り、神と酒食をともにし、その年の豊穰を祈った。さくらは古代人にとって大切な農事暦であり、その開花は一年の吉兆と予兆する聖なる樹でもある。桜樹への信仰という古代人たちの素朴な祈りは今までも日本の春に生きている。

2.3 国花としての桜のイメージ

「履中紀」の宴会では「桜」という文字が登場しただけではなく、もう一つと結びついていたのは桜が王朝の花として歴史の舞台で脚光を浴びられた。誉田別（応神）、大鷦鷯（仁徳）、去来穗別（履中）と三代続いた大和の王権は古代の宮廷サロンを成立させた。履中の王権は磐余市磯池の宴会に極まると言われる。また、その栄華の宴会は桜によって飾られた。それ以後、さくらはより遠い古代の農耕民たちの素朴な信仰の聖なる木から、華やぐ王権に添える貴族たちの花になった。

ふる里となりにし 奈良の都にも 色はかはらず 花は咲きけり (巻第二. 九

○ 『古今和歌集』

すでに廃都となった、荒涼たる平城京なので、木立には花というものはやはり咲くものだ。ⁱⁱⁱ

iii

平城京から北へ、山城国平安京に遷都した王朝貴族たちは、故郷奈良を郷愁していたのである。桜に囲まれた平城京を偲んで、貴族たちはこの新都に桜を移植し、それを歌ったものである。この多くの遷都した貴族たちの郷愁を収録した『古今和歌集』によって桜は日本の花、都の花として定着された。

または『東大寺要録』の「東大寺桜会縁起」には、天平勝宝八年（七六五）三月十六日、この仏法王国実現のために建立した寺で、良弁僧正が盛大な法華経を講じたことがある。その後、この三月十六日を例日として、聖武・孝謙帝を加えて、光明皇后の冥福を祈り、また当代の聖上、皇后の息災、国家の平穩を祈る行事を桜会または法桜会と呼んで、その後何百年の間、毎年桜会が営み続けられたと記載されている。国家鎮護の勅願寺で桜会が営まれたことは、さくらが明らかに国家の象徴であることを物語っている。

2.4 命の花としての桜のイメージ

『日本書紀』には、雄朝津間稚子宿禰（男浅津間若子宿禰）の治世を記録した卷第十三「允恭紀」に次のような桜の歌物語が遺されている。

八年（四一九）の春二月に、藤原に幸す。密に衣通郎姫の消息を察たまふ。是夕、衣通郎姫、天皇を恋びたてまつり独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして、歌して曰はく、

我が夫子が 来べき夕なり ささがねの 蜘蛛の行ひ 是夕著しも

天皇、是の歌を聆しめして、則ち感でたまふ情有します。而して歌して曰はく、

ささらがた 錦の紐を 解き放けて 数は寝ずに 唯一夜のみ

明旦に、天皇、井の傍の桜の華を見して、歌して曰はく、

花ぐはし 桜の愛で 同愛でば 早くは愛でず 我が愛づる子ら
皇后、聞しめして、且大きに恨みたまふ。

八年の二月に、藤原に行幸された。密かに衣通郎姫の消息を御視察になった。その夜、衣通郎姫は、天皇をおしのびになって、一人で座っておられた。天皇が、おいでになったことを知らないで、お歌をよまれて、

私の夫の訪れそうな夕である。笹の根もとの蜘蛛の巣をかける様子が、今はっきり見える。と言われる。天皇は、この歌をお聞きになって、心をひかれるお気持ちになられて、お歌をおよみになり、

さらの模様の錦の紐を解き放って、さあ、幾夜もとは言わず、ただ一夜だけ共寝しようと仰せられた。

翌朝、天皇は、井のほとりの桜の花を御覧になり、お歌をよまれて、

花の細かく美しい桜の見事さ。同じ愛するならもっと早く愛すべきだったのに、早くは賞美せずに惜しいことをしたものだ。わが愛する姫もそうだと仰せられた。

皇后は、これをお聞きになって、また大変お恨みになった。^{iv}

iv

これは若くて美しい妹を恋慕する夫への妻の嫉妬の物語である。さくらは弟姫の美しさの具象化ですが、ここでは美しい女性の面影を映す花となっている。桜の花は生命そのものの美しさから命の美しさのイメージまで昇華した。

娘らが 髪刺しのために 風流士が かづらのためと 敷きませる 国のは
たてに咲きにける 桜の花の にほひはもあなに (若宮年魚麻呂 卷八. 三〇二
『万葉集』)

少女の髪飾りのため、風流な人の髪飾りのためにと、天皇は治めている国のい

たるところに咲いている桜の花の、何と美しいことよ。^v

v

桜を髪飾りにするのは、本来花のもつ生命力を人間に転移させる呪的な営みであった。古代人たちは咲いている桜は少女に、または少女を桜に比喻した。このように、満開の桜のように輝いている若く美しい生命力についての賛歌だとも言える。

2.5 転機としている桜

教室の窓辺には うららかな陽だまり
あと僅かの春のカレンダー
授業中 見渡せば 同じ制服着た
仲間たちが 大人に見える
それぞれの未来へと 旅立って行くんだね
その背中に 夢の翼が 生えてる
桜の花びらたちが咲く頃
どこかで 希望の鐘が鳴り響く
私たちに明日の自由と 勇気をくれるわ
桜の花びらたちが咲く頃
どこかで 誰かがきつと祈ってる
新しい世界のドアを 自分のその手で開くこと
桜の花びらたちが散っても
一緒に過ごした日々を忘れない
つらいことに負けそうなとき この木に帰ろう
桜の花びらたちが散っても
瞳を閉じればいつも咲いている
輝いた青春時代は これから生きてく 地図になる

これは AKB48 の歌「桜の花びらたち」の歌詞である。この歌から桜は日本人のプリムラだけではなく転機の花にも言えると思われる。「桜の花びらたちが咲く頃 どこか

で 誰かがきつと祈ってる 新しい世界のドアを 自分のその手で開くこと」桜の咲く季節からこそ若者たちの人生の展開が開ける。その背中に育む小さな夢は一步々々の努力を積んで、ある日きつと現実になるだろう。夢にかなうのが難しいけれども、この途上で一人ではなく、桜の花びらたちのような私たちは頑張っている。

夢を追う道で辛いことを負っても、失敗しても構わないが、逗留できる桜の樹があるからだ。疲れた人々はここで休憩できるし、やる気がない人々は意気込みが蓄えられるし、いつになっても桜の樹が生えていると私たちも成長している。ここから未来への地図が展開してくる。

3. 結論

日本人は「美しい」が好きだが、その美しさが永遠ではないことを知っている。美しい期間が短いからこそ、いつか散っていく美しさを思い、その美しさを愛している。そのため、日本人にとっては咲いている桜より桜が散る時のほうがさらに美しいと思われる。風に舞って一瞬に散ってしまうので、桜は人間の短い人生を比喻する。人生は桜のようにパッと美しく咲い、パッと散ってしまう。日本人はこのようにはかなくしかし美しい桜の美を深く愛している。

日本では「^{はななぬか}花7日」ということわざがある。桜が咲いてから散るまでただ七日間に過ぎないということである。桜の盛りの短くはかないことに比喻している。短いですが、輝きを示すように頑張っていこうという日本人の人生における価値観を表していると思われる。

日本人は桜の花びらが舞い散っている様子を「吹雪」に比喻している。桜は曇、霞のように咲いて、また、すぐ雪のように散っていく。桜が咲くまでの何年間の準備を一瞬でパッと咲かせ、短い間で美しさを表現して瞬く間に散り去ってしまう。これは少女の美より、人間の生涯よりもっと美しいイメージに繋がっているのではないだろうか。

「敷島の、大和心を人間はば、朝日ににほふ、山桜花」（日本の固有な精神とはどの

ようなものかと問われたら、朝日に照られて香りたつ山桜の花の姿こそ、大和魂であると答えよう) というように、桜は日本人とかけがえのない強い絆によって結ばれ、日本人の血液に溶け込んでしまう。長い冬ごもりから覚めた躍動的な春を象徴する桜は日本人にとって明るい希望と勇気をもたらす心の高揚感をもたらす充実したイメージにつながるように思われる。桜は「大和の心」となったので、ずっと、日本人の好まれ続けるだろうと考えられる。

注：

注 i：井上光貞 『日本書紀』 中央公論社 1971年 P.245

注 ii：小島憲之、木下正俊、佐竹昭広 『日本古典文学全集 4. 万葉集』 小学館 1973
P. 58

注 iii：小沢正夫 『日本古典文学全集 7. 古今和歌集』 小学館 1971 P. 90

注 iv：井上光貞 『日本書紀』 中央公論社 1971年 P. 256

注 v：小島憲之、木下正俊、佐竹昭広 『日本古典文学全集 3. 万葉集』 小学館 1972
P. 302

参考文献：

井上光貞 『日本書紀』 中央公論社 1971年

小川和佑 『桜の文学史』 文藝春秋 2004年

坂本勝 『図説地図とあらすじでわかる！万葉集』 青春出版社 2009年

中西進 『日本人のこころ』 大修館書店 1992年